

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 6 2	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Prenatal alcohol exposure and gender differences in childhood mental health problems: a longitudinal population-based study.</p> <p>妊娠期における母親の飲酒と子供の精神発達異常に関する性差についての検討:一般住民を対象とした縦断研究</p>	
執筆者	
Sayal K, Heron J, Golding J, Emond A.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Pediatrics. 2007 Feb;119(2):e426-34.	
キーワード	
妊娠、胎児期アルコール暴露、飲酒、精神発達異常、ALSPAC(研究名)	
<p>要 旨</p> <p>目的:</p> <p>妊娠中に母親が多量に飲酒すると、子供の身体及び神経系の発達過程にとって有害な作用が出る可能性がある。妊娠中の飲酒量に安全域があるのかどうかはまだはっきりしていない。本研究では、一週間に一回より少ない低レベルの飲酒が、子供の精神発達面での異常と独立して関連しているか、またこれらの関連は性により異なるかを調査する。研究仮説は、飲酒量の多い群でのみ精神発達上の問題と飲酒が関連しており、男児では女児より飲酒との関連が顕著に認められる、というものである。</p> <p>方法:</p> <p>解析対象は、地域住民を対象とした前向き研究である Avon Longitudinal Study of Parents and Children (ALSPAC)である。妊娠初期における母親の自己申告に基づく飲酒量及びその頻度と、児の 47 ヶ月及び 81 ヶ月 (両親からの回答)、97 ヶ月及び 108 ヶ月 (教師からの回答)の時点での行動・感情面での臨床上明らかな精神発達上の問題との関連について調査を行った (件数: 47 ヶ月 (9086 件)、81 ヶ月 (8046 件)、97 ヶ月及び 108 ヶ月 (5648 件))。</p> <p>結果:</p> <p>妊娠中と出生後の諸要因を調整すると、妊娠初期の週一回未満の飲酒は、47 ヶ月女児の臨床的に明らかな精神発達面での問題と独立して関連していた。この性特異的な関連は、81 ヶ月にも継続して見られ、後の教師による報告においても同様であることが確認された。</p> <p>結論:</p> <p>妊娠初期の低容量の飲酒は、子供の精神発達上悪影響を及ぼし、その影響は継続する可能性がある。量-反応関係が明確ではなく、反応が女児に特異的であるなど仮説と異なった結果であったことから、これらの結果は不確定のものと受け止めるべきであり、今後更なる調査が必要である。</p>	